

宇宙に関する本、これまでたくさん読んできました。私を宇宙に導いてくれた本をいくつか紹介します。

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台)



真ん中、「ラジプロ」の無機質な装丁が印象的です。

本を書いています。書きながら何年も経ってしまっているのですが、文字に残す責任の重さがキーボードを打つ指にまとわりついて、なかなか進みません。とはいえ、振り返ってみると私も多くの本に支えられてここまで来ました。

小学生のころの愛読書は「学研まんがひみつシリーズ」。「星と星座のひみつ」「宇宙のひみつ」はもちろん、生き物から自動車・飛行機まで。中身を覚えてしまうほど何度も読み込みました。私の「常識」の半分くらいはこのシリーズで作られた、といっても過言ではないかもしれません。

小学生のころから宇宙は好きでしたが、その方向を決定づけたのは雑誌「スカイウォッチャー」と「ニュートン」。前者は本誌の前身ですね。初めて購入したのは1994年9月号、当時中学2年生でした。シューメーカー・レビー第9彗星の木星衝突の速報記事が掲載されたこの号で、ダイナミックな天文観測に触れまし

た。その後も、アマチュア的な楽しみ方と合わせて天文学の最先端の記事にも大いに刺激を受けました。「ニュートン」で大きかったのは1993年4月号。「天文学者になるには」という特集記事で、天文学を学べる大学一覧が掲載され、研究者の声も掲載されていました。まだインターネットもなかった時代、岡山の片田舎に住む少年にとっては貴重な情報源でした。

大学で天文学科に進んだ後、プロの天文学者を目指すうえで最も重要だった本は「Radiative Processes in Astrophysics」(通称ラジプロ)。物質から電磁波が出る仕組みや、電磁波が星間物質に散乱・吸収される仕組みを論じた、観測天文学者は誰もが通るといっていい定番の教科書です。私にとっては、初めて読んだ洋書でもあります。その後、専門を電波天文学に定めた時に読んだ教科書は「Tools of Radio

Astronomy」。電波がどのように発せられるか、電波望遠鏡はどのような仕組みか、得られた電波からどのように宇宙の様子を読み解くかといった、電波天文学の基礎と実際の研究の過程で参考になる情報がまとめられています。

誰かの人生を変える本を書こうなんて思っただけなのですが、せつかく多少のお金と時間を投じてもらうなら、宇宙とのそれぞれのつながりを楽しんでもらいたい。というわけで、頑張ってキーボードを叩きます。